

—創世記2章・1-2、7-9、3・1-7、ローマ5章・12-19、マタイ4章・1-11—

(そのとき)イエスは悪魔から誘惑を受けるため、「霊」に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』』と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

— マタイ4章 —

#### 四旬節第一主日

### 「自我の克服」

キリスト者は、悪を克服した善の世界を「復活」と呼んで、キリストと共にそこに至ることを人生の最終目的としています。悪を克服して復活を目指す途上で私たちの真の敵は人ではなく、人の自我に住んでその人をコントロールしている悪霊と捉えます。

この悪霊を克服するうえで心得ておかなければならないことは、信仰者が見えない神の存在を信じているように、見えない悪霊の存在も信じていなければならぬということです。

悪霊は、存在しないかのように人の自我に住み、神に代って自分の思いをささやき、人を神から引き離す恐るべき存在だからです。

この悪霊の支配下にあり、私たちが自我

で応ずるなら、それは悪霊の思うツボで、すなわち悪霊同士が引き起こす戦争になり、世は滅びに向かうのです。

悪霊と戦い得るのは、神お一人です。それ故、私たちが悪霊と対峙するには、私の思い(自我)で戦うのではなく、神(聖霊)に戦ってもらわなければならないのです。

聖霊を引き寄せる方法は、主イエスがかつて荒野で示されたように、「自分の思い(自我)に死ぬこと」です。これが聖霊をもたらし、世の悪に勝利する唯一の方法です。聖霊を前にすると、人はいかに神から離れて生きていたかを瞬時に悟る鏡の前に立たされます。そして自分の醜さを見せられて自制を促され、回心無き者は悪霊と共に滅びるしかありません。

四旬節とは、悪霊と戦う力を神に願って復活を準備する期間であり、それは「自我に死んで聖霊を生きる人」となるためにキリストが示された、荒野の断食にちなんで、40日間を「洗礼志願者のための心得と、信者にとつては、洗礼の記念を新たにして」回心を深める時となります。

回心とは、私と神との個人的関係に留まらず、私と社会の罪の連帯性に自覚め、共同責任を自覚する時であり、償い、犠牲、愛の奉仕によって、心を愛で満たして自我を克服する恵みを戴くことです。

2023年 2月26日

主任司祭 昌川信雄



画：昌川神父